

# 第七章 誕生から成人まで

## 第一節 出生

### 一 埼玉県秩父郡大字大宮字宮地に生まれる一

#### 1. 赤ん坊の頃

私は昭和15(1940)年6月8日(土)暑い日の午後3時頃に埼玉県秩父郡大字大宮字宮地に生まれた。母は私が生まれた日はとても暑い日だと話していた。宮地の家は私が生まれて間もなく、引っ越して中村の家に移ったので、幼い頃の私の記憶は中村の家から始まる。私が生まれたので、当時信州の小学校に単身赴任勤務していた父武雄が駆けつけたときの顔が、おぼろげながら記憶の奥に残っている。メガネをかけた父武雄の顔を見て私は泣き出した。生まれたばかりの赤ん坊だから仕方がないとはいえ、父の顔を見て泣いた私は、その日以来、父からあまり可愛がられなかった。泣いたわけは、生まれて間もない乳飲み子の頃に、私はリンパ腺が腫れたので手術を受けた。その痕跡は今も残っているし、母キクのぬくもりと甘い乳の香りの他にもう一つ、白衣で医者メガネをかけた顔と冷たい葉の匂いか記憶の片隅にある。私は髭面でメガネをかけた怖い父の顔が、同じくメガネをかけた医者の顔と重なって、火を付けたように泣いた。リンパ腺の手術をされた医者の顔と父の顔が重なって、恐怖心が先に立って父にはあまりなじめなくなった。乳飲み子の記憶としてもう一つ、中村の家の東の空に双子山が見える。その双子山よりも高く大きく、観音様が乳飲み子の記憶としてまぶたの奥にある。そのようなことがあるはずはない、いるはずもない観音様の姿が潜在意識のように残っているのである。

#### 2. 中村の家－戦争の記憶－

中村の家はトタン葺平屋建だが、入母屋のかなり大きな家であった。南と東に玄関があり、南玄関の上がり端に三畳間がついていた。やっと歩き始めた頃に幼子が押して歩く手押し車が私のために用意してあった。誰かが私を連れて行って見せてくれたのだと思うが、押して遊んだ記憶はない。南東の角の日当たりの良い部屋が子供部屋で、姉や弟や私はこの部屋で遊んだ。子供部屋の北側で、両方の玄関に通じる部屋が居間、居間の西奥が二間続きの寝室になっていた。庭もかなり広く、北東角に土を固めた竈があり、私が生まれたので第一小学校を退職した母は、早朝暗いうちから起きて朝食を準備した。母が学校を辞める前、父方の祖母のサイに背負われた私は、紺色のスーツ姿で出勤する母を見送った記憶が残っている。すらりとした母を見る、唯一の私の記憶である。後の母の姿は、すべて肥満体だ。ねんねこという、赤子を背負うときに使う綿入りの厚着にくるまれた私が、父方の祖母に背負われながら、裏の家が空襲の焼夷弾にやられて炎に包まれている光景が記憶に残っている。空襲のたびに、たとえ真夜中でも、東側の庭に作られた防空壕に家族が潜り込む。6歳年上の兄に背負われながら、ブドウのつるに触れて首筋から背中に入ってくる



手押し車と私

る雨水がいやでたまらなかった。白昼に秩父の町の南東方向に聳え立つ武甲山あたりで、何機もの飛行機が空中戦をやっていた。昭和20年8月15日正午、昭和天皇が肉声により日本国民に終戦を布告する放送を聞いた。声も何も覚えていないが、もう空襲がなくなって、夜中に防空壕に潜り込まなくてよいと聞いて、ホッとした安堵感は強烈に残っている。

父が軍隊から帰ってきた。父は伍長で日本に残ることができた。空襲のたびに「こんなところで死んでなるものか」と真っ先に防空壕に潜り込んだと何度も話した。食糧難だった。私たちはやせ細った。みなが手足の関節が妙に太く大きく目についた。みなが飢えていた。私が道に落ちていた干し柿の食べかけを拾って口に入れたら、すぐ上の姉の廻代が

母に告げ口した。私は母と姉に「そんなことをしてはいけない」とひどく叱られた。ただただ食べたかったという感情しか残っていない。姉はすごかったと思う。だから他の兄弟達と比べて一番小柄なのかも知れない。そういえば、すぐ上の姉は成長期にもあまり食べなかった。ご飯は軽く一膳で、あとは飴やお菓子をちよつと口にする位であった。それなのに胃潰瘍の手術をして、のちに肝炎にかかり、今はインターフェロンのお世話になっている。弟の久雄も胃潰瘍の手術をしてインターフェロンのお世話になっている。

### 3. 遊び

家から50m位の所の、まっちゃんという女の子とよく遊んだ。お手玉をしたり、ままごと遊びをよくやった。本当に仲良しだった。まっちゃんのお母さんは「わしゃあ、泰っくんに惚れた」と言った。そのまっちゃんと弟が口げんかをした。二人して相手が悪いと口々に私に言い立てた。私は何故口げんかをしたのかよく覚えていないし、どうでもよかった。どっちが悪いのかと、まっちゃんが私に詰め寄ったときに、私は本能的に弟をかばって、まっちゃんを一喝してしまった。それ以後、まっちゃんと私が仲良く遊んだという記憶がない。遊びたかったが、まっちゃんは私の所に遊びに来なかった。私は淋しかったが、遊びに行かなかった。



七五三のお祝い